

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號五第

卷七十二第

行發日一月一十年三和昭

## 論叢

混合勘定に關する一考察 . . . . . 法學博士 上野道輔

勤勞所得に對する課税 . . . . . 法學博士 神戶正雄

貞享以後長崎の支那貿易に就いて . . . . . 文學博士 矢野仁一

租稅負擔及び經費の國際比較 . . . . . 經濟學博士 沙見三郎

## 說苑

重農學派の人口論 . . . . . 法學士 山口正太郎

明治初年に於ける大阪通商會社 . . . . . 經濟學士 菅野和太郎

## 雜錄

伊太利に於ける貯蓄銀行制度改正に就いて . . . . . 經濟學士 松岡孝兒

佐田介石の舶來品排斥の思想と運動 . . . . . 經濟學博士 本庄榮治郎

重農學派の人口論

山口正太郎

一 序 言

佛國重農學派の出現直前の同國の所謂人口論なるものは、人口増加謳歌論であつた。而して此論の由來する處は、(一)一七〇〇年の中葉頃は戰亂相繼ぎ、攻防共に兵士を要すること多く、人口の厚薄は勝敗の一決定原因たりし事實より生ずる政治論・軍事論。(二)當時、英國を中心とせる重商主義が金銀を以て富なりとするに反對し、人口そのものが富なることを主張せんとする經濟論。の二つであつた。其結果、此派の論者は唯一方的に人口の増加を主張したるため世に人口論者 Populationiste なる名稱を残すに至つたのである。

此單純なる人口論者に對して反駁せんとして起ちたるものが重農學派の人口論であるが、當時の佛蘭西は、(一)コルベアの工業重視政策のため、都市に漸く工場工業の勃興となり、從て人口の

1) Weulersse, Le mouvement physiocratique en France de 1756 a 1770. Tome II. 1910. p. 269.

都市集中の勢を馴致し、人々農村を棄て、工業労働者たらんとせし事、(二)コルベアは更に之等の工業労働者の生活を安易ならしめんがため、農作物、殊に穀物價格を低下せしむる政策を採りたること、(三)戦亂のため常備軍を要すること多く、農村青年を徴集し、農村の經濟的活動力を殺げること、(四)租税は政府の恣意によりて改廢せられ、農業投下資本に對して他よりも重き課税をなしたるため、農業資本が續々引上げらるゝに至つたこと。以上の諸事情のため農村の人口は稀薄となり、農民の疲弊は甚だしく此儘では傳統的に優秀の美を誇つた佛國農民も滅亡の他なき状態であつた。此時代の背景は佛蘭西に特に重農學派の經濟學を發生せしむるに至つたのであるが、以上の諸事情を考慮し之が對策を講じ、進んで小農よりも大農を獎勵し、其他微細なる農業技術論に及んだものが此派の首唱者ケネーの「小作人論」(一七五六)及び「穀物論」(一七五七)である。<sup>2)</sup>

以上の如き農村疲弊の社會状態を研究對象として出發した重農學派の經濟學は人口に對する考察を重要項目としたことは理の當然である。

以下、此派の重要な人物たるケネーとミラボーとの人口論を考察するであらう。乍然茲に一言したきは此二人とも各種の著書、論文に人口に關する意見を斷片的に發表せるものあるがため之等を考證するは煩瑣であるから、ケネーに就ては人口に關する最も纏まれる論文にして、長く原稿の儘保存され近年迄公表されたりし Hommes. 1757 により、ミラボーに就ては「人間の友」第一卷(一七五六)(註)に専ら依據することとする。<sup>3)</sup>

2) Quesnay, Fermiers et Grains. Oeuvres. 1888. p. 159 ff et 193 ff.

3) Quesnay, L'article Hommes 1757; Mirabeau, L'Ami des hommes. Avignon. 1756.

(註) ミラボールの「人間の友」に就て、當時の重農學派中、有名なる文献學者 Dupont de Nemours は一七五七年の中頃に前三卷が出版され、翌一七五八年に第四卷が、共に巴里の *neuve Notre Dame* 街の出版業 *Herissant* から出版された (*Œuvres de Quesnay*, 1888. p. 153-154) と云つてゐるが、私藏本第一卷はそれより以前一七五六年刊行であり、然も發行は巴里でなく南佛蘭西アヴイニオンである、此點を疑問として考證家の教を乞ふ。

## 二 ケネーの人口論

ケネーの人口論なるものは別に一篇を成すものではなく、何等組織立つたものではないので彼の諸論文より人口に關する意見を摘出するの他なきものと從來考えられてゐた、現に「人口論の歴史」を著せるリオン大學のゴンナール教授の如きも斯く云つてゐる。<sup>4)</sup> ケネー全集のみによつてケネーの人口論を知らんとする者には以上の方法以外にはないのであるが、果然全集公刊の後、ケネーが特に人口論を述べた原稿が発見された、一八八九年、彼の經濟表の發見者と同一人なるウシャーンの人、パウエル氏は巴里の國民圖書館 *Bibliothèque nationale* の原稿の部 *Aquisitions nouvelles* *françaises*. No. 1900 に於て發見したのであるが、此原稿は「經濟及び社會學說史雜誌」の創刊號(一九〇八)に掲げられてゐる。<sup>5)</sup> 以下此雜誌に掲載されたものによつてケネーの人口論を略述する。(註)

(註) 此原稿は佛國革命時代の著述家 *Theophile Mandar* 氏の所蔵する處であつたが、國民圖書館が買入れたもので、處々に

- 4) Gonnard, Histoire des doctrines de la population. 1923. p. 165.
- 5) L'article Hommes de Quesnay, Revue d'Histoire des doctrines économiques et sociales. 1 année. 1908.

綴字の誤があることから、之は誰かと複寫したもので、然もケネーの校閲を経てないものであらうと云ふ。(Schelle, Le docteur Quesnay, p. 212) 此本来の原稿はケネーが一七五七年に執筆し Encyclopédie に掲載する筈の處、此辭書の公刊が中止されたので空しくケネーの手に死藏されてゐたといふものが (Du Pont de Nemours, Ephemerides du citoyen, t. I, p. XXXII Quesnay, Oeuvres, p. 152-153.) 其後行衛不明となつたものである。

抑も人口は單純なる人口増加謳歌論者の稱ふる如く、何等の前提もなく無暗に増加し得るものではない、人口増加は國民の所得の増加と比例するものである、國民の所得は即ち富を意味するから、人口は富と比例して増加すると云へる。而して富は他の人々(重商主義者)の主張する如き金銀の額ではない、金銀の額は眞の富の半をも示すものではない、眞の富とは年々の所得の集積であり、所得の發生は農業生産による純收入 *produit net* に基く、人口は此所得又は眞の富の存在を前提として初めて増加し得るものである。

此ケネーの人口増加の前提は約四十年後に公にされたマルサス人口論の第一版の彼の有名な二大前提の一つ、即ち人間の存在には食糧の存在を必要條件とする<sup>7)</sup>と云うを既に夙く道破せるものであつて、此論旨は又ケネー全集の處々に見らるゝ處であるが此點を力説する人はケネーを以てマルサス人口論の礎石を置くものとさえ云つてゐる。<sup>8)</sup>

さて當時の佛蘭西の人口は十八世紀初頭に至る約百年間貳千四百萬を上下し來つたのであるが、十八世紀になると共に戦争と宗教上の壓迫によつて俄然人口の減退を生じ、此世紀の中葉にはケネーの計算によると千九百五十萬となつた、<sup>10)</sup>然るに英國は之亦ケネーの計算によれば英蘭

6) Quesnay, Hommes. Revue. p. 14.

7) Malthus, An Essay on the principle of population. 1798. ed. by Bonar. 1936. p. 11.

8) Quesnay, Oeuvres. p. 187. 246. 269. etc.

9) Spann, Die Haupttheorien der Volkswirtschaftslehre. 1923. S. 40.

七百萬、蘇格蘭二百五十萬、愛蘭百五十萬で合計千百萬に過ぎない、<sup>10)</sup>今もし英佛兩國民の所得を等しとしたならば、比較的人口多き佛蘭西は行政上に於て、又軍事上に於て出費がそれだけ多く、結局、國民の富は人口少き英國の下位に立つ、單純な人口増加謳歌論者の希望する如く無暗に人口が増加すれば、行政上の出費、徒らに増加し國富の減少となる、人口の増加そのものを以て國富の増加なりと見るが如きは謬見も亦甚しきものである、況んや人口の増加は所得の増加を必要條件とすべく、所得の増加無くして人口のみ増殖せしめんと企圖するは自然の法則を破るものにして絶対に不可能なるに於ておやである。

斯くケネーは人口増殖よりも其條件たる國富充實の先づ行はれざるべからざる事を主張するのであるが、當時の佛蘭西に於て國富充實の最大障害を爲すものは戰亂に基く軍備の擴張であり、農村青年の徵發による農村の荒廢である、彼は曰く軍隊は國防の器具である、此器具を働かすものは國富である、此背景たる國富を無視して、單に戰爭のみを描く歴史家ありとすれば、そは眞の歴史を傳ふるものではない、否一步進めて云へば勝利の原因は國富の如何にある。<sup>12)</sup>此論旨に於てケネーが唯物史觀の片鱗を示せるを祝ふことを得る。さて當時の佛蘭西の常備軍は六萬人で六年兵役であるが、更に六年間に於ける補缺として二萬人を要するから合計八萬人の青年を要する、而して此兵役制度は三十年以前より施行され來つたから、ケネーの計算によれば此間三十萬人の青年が結婚から阻止され、其結果一家族平均四人として、三十萬戸、即ち百二十萬人の人口増加が該兵役制度によつて阻止されたことになる、斯くてケネーは長期間の兵役制度が人口増加

10) Quesnay, p. 7.

11) Quesnay, p. 14. note.

12) Quesnay, p. 15.

を阻止し農村を荒廢せしむる理由を以て之に反對し、且つ佛蘭西の國防の目標は英國にあり、新興獨逸は國富充分ならざるため佛蘭西の敵にあらず、而して英國は海軍擴張に努力せるを以て佛蘭西も亦、其方針を一變せねばならぬ、海軍の擴張は其背後に商船の活躍を伴ふから、結局海軍の失ふ出費は、商船の海外貿易によつて償ひ得ると云う。此時事論に際して我々は其底を流れる一貫せる理論を發見する、それはケネーが自由貿易論を主張せることで、彼はクロムウエルの航海條例に反對し、商業の繁榮は自由と、共通の福祉に好都合な法律の制定にあることを述べ、<sup>13)</sup>商品の有無相通の自由たるべきことを力説してゐる。ケネーが獨占、特權、關稅等を排し、自由競争と自由貿易を主張せる點はケネー全集中の多くの論文にも見る處であるが、彼が自由貿易論を主張するに至つた一つの理由を推測するに、當時コルベアの工業重視政策のため、工業保護に偏傾し、都市勞働者の生計安易のため、穀物の價格を低下せしむる人爲策を採つたことに對し、彼は農村の立場より之に反對し、價格は之を自由競争の下に成立せしむべく、もし人爲的政策によつて國內に於て不當に廉價なる時には海外に市場を求め、穀物の價格を維持せしめようと考へたからであると思はれる。

學說史上興味ある事はケネーが使用價值 *valeur usuelle* と商品價值 *valeur vénale des richesses commerciales* 或は價格 *prix* との區別を説き前者は人類の欲望と關係するも、後者は人類の意思より獨立した諸事情によつて變化し、隨意の價值 *valeur arbitraire* でないことを述べ、更に前者の例として食料品、後者の例としてダイヤモンドを挙げた點で、<sup>15)</sup>約二十年後出版されたるアダ

13) Quesnay, p. 20.

14) Quesnay, Oeuvres. p. 4&amp;4. 553. 671 etc.

15) Quesnay, Hommes. p. 24.

ム・スミスの富國論が兩者を區別し、其例證として一方にダイヤモンド、他方に水を擧げたのど食料品と水との差こそあれ其他は殆ど符節を合するが如くである。ケネーは更に一步を進めて、使用價值と價格又は交換價值 *va leur venale* とは一見無關係なる如くにして實は然らず、個人の隨意に決定し得るかの如き使用價值は交換價值によつて決定されるので、例へば穀物の豊凶に基因する穀價の騰落は穀物に對する個人の使用價值を規制し決定する、其處で先づ考察の對象となるのは交換價值又は價格であるとなして、使用價值の考察を打切つて價格の研究に着手する。

價格は富の交換の割合を貨幣にて表はしたのである、然し此貨幣は商業の道具であつて富そのものではない、一國の富は交換し得る財の豊富と其正常價格である。17) 彼が重商主義者に反對して金銀の量を富ではないとする主張は彼の諸論文の隨處に發見し得る處であるが、彼が富は財の正常價格 *bon prix* に於て成り立つと云う其正常價格なるものは彼によれば良好なる耕作と順調なる海外貿易の下に於て決定される價格である、一時的に大なる利潤を發生せしむる高價 *cherte* は富を形成せない、ケネーは價格論に於て一般的抽象的に財の價格を論ずるに當つても不知不識の間に穀物の價格を以て財一般の價格を代表せしめてゐるので、此間にも彼の重農思想が視はれるが、一時的價格を排して正常價格を主張する點に於て又、彼の思想の根底たる自然の秩序 *ordre naturel* の考を見る<sup>18)</sup>ことが出来る。

さて以上述べたる如く、ケネーによれば一國の富は金銀の量ではなく、財・殊に穀物の豊富こそが正常價格を維持してゐることである、此正常價格を維持することは、農民が穀價の騰落に無

16) Adam Smith, *Wealth of Nations*, Cannan's ed. Vol. I. p. 30.

17) Quesnay, *Hommes*, p. 25. *Oeuvres*, p. 238, 239, etc.



關心に、即ち海外貿易によつて穀物の需給を調節することによつて急激なる穀價の騰落を常に防ぎつゝ、其生産費を償ひ且つ正當なる利潤を續け、斯くて農民は其富を徐々に増加し行くことを意味する。農民が豊かであるならば、其結果期せずして人口の増加を伴ふ。乍然此富と人口との増加は二つの前提を必要とする、そは經濟活動の自由と財産の安全とである、<sup>18)</sup>此二大前提こそは資本主義經濟組織の基礎であり、正統學派を初め、所謂資本主義經濟學を主張するものゝ公理として認むる處である。ケネーは此二大前提の下に富の増加が先行條件となつて人口増加を伴ふと云うが、此先行條件は單に富そのものゝ増加のみでなく、更に此富の用法と、並びに人間の用途如何が條件となるのである。<sup>19)</sup>L'accroissement de la population dépend entièrement de l'accroissement des richesses, de l'emploi des hommes et de l'emploi des richesses. 如何に富が増加するも、そが奢侈的に費消され、人民が戰爭、其他の苦役に使用さるゝ時は、必然に人口増加を齎すものではない。然らば富と人口とを如何に使用すべきか、ケネーは勿論之を農業生産に使用すべきことを主張する、國民の大部分を占むる労働者階級を農業生産に使用することが他の部門に使用するよりも遙かに多く人口増加を齎すことは重農學派以外に於ても後年マルサスがアダム・スミスに反對して主張した處である。<sup>20)</sup>而してケネーは此農業生産に従事せる労働者に對しては其労働の結果を充分に享受せしめんことを力説する、蓋し當時ウキリアム・ペティが、労働の動機を以て貧困にありとし、労働者をして勤勉たらしめんには常に彼等を貧困状態に置かざるべからずと稱し<sup>21)</sup>此説が可成り人口に膾炙してゐたから之が謬妄を指摘し、労働の動機は貧困ではなく假令労働者

18) Quesnay, Hommes. p. 39.

19) Quesnay, p. 38.

20) Malthus, *ibid.* p. 326.

21) William Petty, *Political Arithmetic*. Ch. II. *Treatise of Taxes*. Ch. V. Ch. VI. Ch. XIV. etc.

の報酬を多くし、生計を安易ならしむるも決して彼等をして怠惰に導くものではないことを高調する。<sup>22)</sup>而して農業労働者の高き賃銀は必然に彼等の消費を促がし、財の循環を刺戟し、結局農業生産の増加を齎すこととなる。故に農業労働の賃銀の高きは國富を減少せしめず、反對に之が増加を齎し、農業生産を年々に擴張せしむることとなる。之に反し彼等の賃銀低き時は、凶作に會せんか、彼等は忽ち浮浪の徒と化し、社會の下層に沈淪し、土地は荒廢し、之が恢復容易ならざるに至ると云う。<sup>23)</sup>

更にケネーは人口増加を抑止する大原因を農業課税にあると見る、當時、佛蘭西政府は穀物生産と並びて重要なる葡萄酒に高き課税をなさんとしたがため、ケネーは極力之に反對し、葡萄酒の課税は一見、消費者に之を轉嫁し得て葡萄酒栽培者に無關係なるが如くであるが、若し課税によつて葡萄酒の價格が騰貴する時は國民は代用飲料を使用するに至るであらう、且つ葡萄酒の消費者たる近隣各國は輸入を見合はす結果、租税の負擔者は葡萄酒栽培者自身となり之が高き時は栽培を廢止するに至り、二大農業の一を失ひ、其爲め國富を減じ、間接に人口増加を阻止することとなる、農産物の課税の弊害は他の課税に比し甚だしきものがある。<sup>24)</sup>

斯く彼は農業課税の弊害を述べると共に更に一步を進めて重農學派の社會階級別を叙述する、此階級別の經濟的機能は後に彼の經濟表に於て詳細に説明せらるゝ處であり、且つ他の學派よりの攻撃の目標となれるものである。即ち彼によれば人口増加の一原因たる既存人口の使用方法、即ち農業生産に従事するの多寡を常に念頭に置きつゝ、此種の人々を以て生産階級を構成せるも

22) Quesnay, Hommes. p. 43. 44. Oeuvres. p. 335.

23) Quesnay, Hommes. p. 45.

24) Quesnay, p. 46. 47.

のご見、且つ此階級のみが眞に富を生産するものと定める。其他に更に二階級がある、一は地主及び主権者階級で、生産階級たる農民に土地を貸與し、或は租税を徴收して生活資源となすものであり、生産階級が産み出す剰餘たる純収入は結局彼等の手に移るものである、他の階級は商工業者から成立つ不生産階級であり、彼等は外見上、金錢的収入あれども、本來貨幣は富循環の手段にして富そのものにあらず、従て彼等は何等富の生産を營むものではない、彼等は唯加工し、或は運搬するのみである。ケネーの經濟表は此三階級間に於ける富の循環を表示したものに他ならない、尤も彼は此三階級外に下層階級の存在を認めるが、之等は單に消費にのみ參加し、富の循環場裡から無視しても差支なきが故に表に上さなかつたのである。彼が商工業者を以て不生産階級となす點に他學派の攻撃が集中されてゐるが、それだけ又此點は重農學派の特色となれるもので、彼は云う、布を製造する製布業者、衣服を造る裁縫師、靴を造る製靴業者は、料理人が主人に食事を提供し音樂師がコンサートを行ふと同じく、富を生産するものではない、彼等は報酬を受くることも一國全體の立場から見れば富は、彼等の活動によつて毫末も増加しては居ない、富の生産は唯土地に依存し、土地のみが生産費を償つて、より以上に剰餘を生産し富を増加する。<sup>25)</sup>富の生産が如何なる階級によつて行はるゝか、明瞭となれば、國家の採るべき政策は自ら定まる、それは未墾地の開拓と、農民をして生活に安堵せしめ、其業を勵ましむるにある、未墾地の多いのは一見、農民の怠惰に基くやうであるが、それは怠惰でなくて、實は農民の無能力である、此無能力は農村資金の缺乏と、政府の誤れる政策によつて生れる。人々は農村人口の減退を嘆く

が、其原因たる農村の富の減少を嘆くものを見ない、人々は小麦の増産を希望し乍ら其生産に幾何の費用を要するかを知らない、斯く論じ來つて、ケネーは農民の貧窮状態を述べ、又もや農業課税の不可なるを論じつゝ、コルベアの重工政策と穀價引下げ策の誤謬を攻撃する。<sup>626)</sup>

乍然農民は又徒らに穀價の高きことのみを希望してはならない、彼等は反面に於て生産費を節約する方法を講ずるを要する、而してそのためには佛蘭西當時に行はれたる小農組織を大農組織に、耕作用の牛を馬に換えねばならぬ、此事はケネーの農業技術論として、「穀物論」一篇の論旨を形成してゐるが、彼は此人口を論ずる論文に於ても亦同一趣旨を述べてゐる。<sup>27)</sup>生産費を低下するため人間労働に代るべき獸類の力があれば之を利用すべきは勿論であるが、此力を利用し得ざる農産物がある、佛蘭西に於ける二大農産物の一たる葡萄の栽培に於ては、全く人間の腕以外のもを用ひ得ない、従て葡萄栽培に於ては生産費が穀物より高きは當然である、乍然此生産費の高きは不欠缺の事情に基くが故に、之が引下げは無理である、コルベアの政策が、高價の故を以て葡萄栽培を壓迫し、之を穀物生産に向けしめ、以て都市労働者の生計を安易ならしめんとするが、葡萄栽培は之を他國に輸出することによつて國富を佛蘭西に齎すものであるが故に、之を抑壓するは誤である。

終始一貫コルベアの重工政策を排撃し來つたケネーは乍然、總ての農民を重要視し、之を保護すべしと主張するのではない、等しく農民と云うものゝ中にも生産的なるものと然らざるものがある、佛蘭西に於ける農民の相當數は彼等の消費を目的として些細なる農作を營んでゐる、彼

26) Quesnay, p. 53-54.

27) Quesnay, p. 57.

等は餘剰生産を行はざるがため、國富の上より見れば無關係のものである、否、彼等のためにも國家は行政費を消費しつゝあるが故に、彼等の存在は國富に損失を與えるものである、<sup>26)</sup>從て重農主義者は先づ玉石混淆の農民を區別し、其重んずべきと否とを分たねばならぬ。ケネーの此見解を見れば、世の學者が重農學派と云へば無批判に農業全班を重要視し、偏重するものと解することの誤れるを知り得るであらう。

生産費節約の問題と關聯して興味あるは、當時勃興せる工業に伴ふ諸機械の發明と失業問題である、ケネーの機械觀は頗る進歩的である、當時リオンの織布業に於て機械の發明は織布の價格を暴落せしめ、一方従業員の失業を生ぜしむるがため、之が採用を拒否し、又之と同一問題はサオーヌ河とロアール河とを連絡する運河の開鑿は、荷物運搬業者を失業せしむると之が反對の聲が高かつた、又巴里市に於て水道を設置するに對し従來の飲料水配達人が失業するとの反對もあつた、ケネーは此等の反對論を以て一局部を見て、人類の幸福を忘れた偏見だとして、もし失業者が轉職し得なければ、其間資本家なり公共團體なりが、彼等を扶養すべしと云つてゐる。<sup>26)</sup>

ケネーの人口論は以上叙述したる處により知らるゝ如く、人口そのものを以て富なりとする人口増加論者に反對し、恰かもマルサスの稱ふるが如く、人口の増加は生活資料の存在を前提とする、換言すれば年々生産を繰返さるゝ富の現存を必要とする、今もし此前提を破つて人口増加とせば、増加人口は必ずや悲惨な状態に沈淪し、既存の國富を消費し國家の衰亡となり、遂に人

28) Quesnay, p. 59.

29) Quesnay, p. 71. 72. note.

口自身の減退を生ずる。無暗に人口を増加することを以て國富の増進なりと考ふる人口論者は、金銀の蓄積そのものを以て國富なりと考ふる重商主義者と共に誤謬に陥つてゐると云うにある、而して金銀の獲得の誤れる途に進みたるため衰亡したる西班牙の例を舉げ、同國がアメリカの發見以前は有数の農業國として繁榮したにかゝわらず、秘露の金鑛の發見により國內の生産力を擧げて之に使用したりしがため國內の農業衰え、國力も亦、從て衰微し人口の減退したりし事を述べ、農業が唯一の生産業たるを力説する重農主義の中心思想を述べ、人口に關聯して各種の經濟問題に説き及んだのが彼の「人口論」[Thomas]の要旨である。

以上で略々ケネーの人口論を敘述し得たと思はれるから次にミラボの人口に關する考察に移るであらう。

### 三 ミラボの『人間の友』

ケネーの人口論は、人口増加論者が人口を富なりとし専ら人口増加を奨励するに反し、マルサスの稱ふるが如く人口増加の先行條件を爲すものは生活の資料であり、生活資料の存在以上に人口は増加し得るものでないことを主張したる點に其特色を有する、而してミラボの人口論は此兩極端ケネーと所謂人口論者との中間に立ち、人口は富そのものなると共に、そは生活資料の存在を前提とすることを認め、猶、人口と生活資料との關係はケネーの説くが如く純粹に一方的ではなく、相互が原因となり結果となることを説かんとするにある。

ミラボアの著作は其題名「人間の友」が示す如く嚴密なる經濟學上の著述ではない、ミラボアは本來經濟學者ではなく、道德家、政治家乃至熱情家である。熱情家であるが故に學理に於ても實際問題に際しても無理を通さんとする處がある。此理由によつてケネーに比して彼の議論が科學性に乏しきは不止得る事であると思う。如何に彼が學問上の概念に曖昧に、且つ無頓着であるかは次の例が之を示す。「人間の増加は之を人口と稱す、而して土地の生産物の増加を農業と云う」、共に増加なる文字を挿入したるは解するに苦しむ處であつて、之れ恐らく彼の性癖の齷齪なものであらう。

ミラボアは第一卷第三章を『生活資料を増加し得る唯一の農業は諸技術の最高のものなり』と題して、重農學派の根本思想を述べてゐるのであるが、彼はケネーの如く社會階級を區別し農民のみを唯一の生産階級とし、他を生産に參加せざるものとするものでもなく、又農業の他に優る所以を科學的に説くでもない。彼にあつては唯農業が道德と合致する生産業なので此意味に於て農業が人間最高の技術なるを説くのである。

彼は此書の題名『人間の友』が示す如く、人類の特色を以て其社會性にありとして、之を本書の基調とするのであるが、先づ彼は從來の動物の二大分類たる野獸と家畜との區別を曖昧なりとして斥け、孤立的動物と社會的動物とに分ち、人類の特色を後者にありとする。乍然、人類の行動は常に必ずしも此特色を發揮するものではない、時には反社會性、孤立性を出すのであるが、之は貪慾となり、農業以外の人類活動となつて表現される、貪慾は先づ金銀に向けられるが、金銀

31) Gonnard, Histoire des doctrines de la Population, p. 161.

32) Oncken, Geschichte der Nationalökonomie. S. 402.

33) Mirabeau, L'Ami des Hommes, 1 part. 1 éd. 1756. p. 35.

34) Mirabeau, p. 12.

は單に人の手を移るに止まり、富そのものではない、之を自己の手に止めるには、土地に埋没するの他はない。<sup>35)</sup>然るに農業は人類の特色たる社會性を發揮する仕事であり、最も高貴なものであり、相互扶助性をもつたものである、農業上の發明があつた時には發明者はそれを匿すことなく隣人に告げるであらう、他の仕事では發明者はそれを匿すに努力するであらうが、農業の社會性は之を許さない。<sup>36)</sup>ミラボーにあつては農業の優越性は先づ第一に人類の道德との合致である、尤もケネーも農業が自然の秩序 of the nature に依據すること多きことを述べ、自然の秩序は即ち神の攝理であるから農業は神の意思に基く唯一の産業であることを述べては居るが、ミラボーの道德とはケネーの如き、深い意味のものではない、ケネーは自然の秩序と人爲の秩序 of the positive を區別し後者は前者によつてのみ人類社會の眞の秩序となること、自然の秩序は永恒に亘り不變であるが人爲のそれは常に變化すること等を述べてゐるが、ミラボーの道德はオンケンOnckenの云へるが如く、唯人類社會の表面的なものに過ぎない、ミラボーの着眼せる處はケネーの所謂人爲の秩序だけである。<sup>37)</sup>

第二にミラボーによれば農業の優越性は其實利性に基く、彼は云う、農業を無視したる國家にして永續したるものは史上に一つもない、希臘は工藝 藝術に後世を驚かすに足つたが、彼等の重要視したのは立法者、哲學者、詩人、雄辯家等であつて最も必要な農業は奴隸に委して顧慮せられなかつた、其結果希臘國家は永續せなかつた、羅馬にあつては農業は漸く重要視され、農民の勞働は裁判官、將軍等のそれと等視されたが然し彼等羅馬人の心奥に潜むものは征服の慾望で

35) Mirabeau, p. 96.

36) p. 97. 98.

37) Oncken, Geschichte der Nationalökonomie. S. 402.



あつた、それがために遂には農業は奴隷の手に委ねられた、而して羅馬を征服した野蠻人達は又軍事的政治を敢くに餘念なかつたから國家の繁榮を期待し得なかつた。<sup>38)</sup> 歴史を顧るに農業を無視して繁榮した國は一つもない、農業こそは道德上最も賞讃すべき仕事たると共に最も實利的なものであり、且つ之に投じたる人間の努力は利益を齎して必ず其人に歸り來る仕事である。<sup>39)</sup>

ミラポーは第四章を『農業に關する佛蘭西の優越』と題し、農業は氣候と土地の豊饒との自然條件に、農民の勤勉を加えて初めて完きを得る。佛蘭西は此三條件を備え、加ふるに國境に聳ゆる山岳は中央の廣き沃野に水流を與え、自然に灌漑の便を與えてゐる、佛蘭西は之等の條件に於て、歐洲第一である、然るに佛蘭西の農業が振興せざるは何故であらうかと設問する。

之に答へるは第五章『農業を衰微せしむる不都合な諸事情』である。ミラポーは佛蘭西農業を衰微せしむる事情を列舉してゐるが、先づ第一にケネーとは全く反對に、彼は小農制度を以て大農制度に優れりとし、當時都市富豪が土地を兼併し、祖先傳來の自作農が此勢に壓迫されつゝあるのを以て、佛蘭西農業衰頹の第一原因なりとする、ミラポー自身大地主であつたが或は自ら其所有地を巡視せる時、境界の垣根の外を通れる旅人が、働ける農夫に此土地の所有者の誰なるかを聞き、土地が荆棘を以て蔽はれ荒るゝに委せてゐる事を以て、其所有者の愚鈍を笑つたのを聞き、翻然悟る處あり、其所有地を分割して農夫に貸付けたれば、彼等の勤勉は忽ち荆棘を拓き美田となし、ミラポーの収入をも二倍するに至らしめた。<sup>40)</sup> 此實驗を一例證として曰く、大魚の生棲は其池を荒す如く、大地主は小地主を併吞し、自作農を衰亡せしめ、土地を荒廢に歸せしむる、

38) Mirabeau, p. 89-91.

39) p. 95.

40) Mirabeau, p. 119, 120.

蓋し土地は所有に伴ふ愛着心を以て初めて其効果を發揮するものであるからである。更にミラボーの議論は一步を進めて道徳論に入る、即ち之等の大地主は自己の所有地に止まりて土地を管理するにあらずして、大都會に出で奢侈の生活を營み、田園の富を吸収して都市にて消費するがため、田園が益々疲弊し、合せて都市の奢侈的生活が農民を誘惑し、都市集中と田園荒廢とを伴ふことを嘆く。

佛蘭西農業衰頹の第二の原因は、第一原因と關聯する處の人口及び富の都市集中である、都市の中でも人々の目標は巴里である、ミラボーは曰く、國家にとりて首府の存するは人體に於ける頭腦の如きである、然し頭腦が大に過ぎ血液が此處に集中する時は身體は瘠せ衰えるは自然の理である、或は又都市は瘤に譬えが事が出来る、大きな瘤は血液の流通を妨げ健康を害するであらう、農民が土地を棄て、都會に集中するは佛蘭西の國富の源を涸渴せしむるものである。<sup>41)</sup>

第三の衰微原因は政治の不安定である、シャルル九世の時には佛蘭西の人口は千九百萬であつたが、ルキ十四世の時には千七百萬に減じてゐる。<sup>42)</sup>此原因は政治の不安定と之に伴ふ重税、宗教的壓迫等である。第四は利子の率の高きことである、<sup>43)</sup>其結果、資本は奢侈品工業に集り、利益率の低い農業には殆ど投下せられない、農業金融の逼迫は農業を衰頹せしむる大原因である。

佛蘭西農業衰頹の諸原因を擧げ來つてミラボーは之が對策を第六章以下に示すのであるが、之等の問題は茲に關係なきが故に之を省く、さて以上の如き佛蘭西農村の衰頹は必然に人口の減退を伴はねばならぬ、然らばミラボーが人口に關して如何なる考をもつてゐたであらうか。

41) Mirabeau, p. 134. 137. 138. 148.

42) p. 154.

43) p. 170.

ミラボーは彼の人口論の要旨を第二章『生活資料の存在程度は人口のそれを示す』と題して述べてゐる。

佛蘭西人口の減退を嘆ける多くの識者は諸種の防止策を考案してゐる、結婚の奨励、獨身者壓迫、子供を有する家庭に補助金支給等は之であるが、之等の策は人口減退の原因を解せざるがため、宛かも種を蒔かずして肥料を施し、水と與え、以て收穫を夢みるが如きものである。<sup>44)</sup>

人口は生活資料の存在を前提とする、生活資料の存在以上に人口を増加し得るならば、此世界に羊の數よりも狼の數が何百倍かする譯であらう。又獨身者の多いことを非難する前に、何が故に獨身者が多いかの理由を究める必要がある、それは全く生活資料を缺くが故に家庭を有し得ないのである、總て人口は生活資料の存在を前提として初めて増加し得る、然らば人口を増加せしむべき生活資料は何處から得らるゝか、昔、勤勉なる一羅馬人は一アルバンの土地を耕すことによつて彼の家族を養ひ來つた、而して何等耕さざる野蠻人は唯狩獵によりて生命を維いでゐたから一人が生くるに五十アルバンの土地を要した、此比例で計算すれば壹千アルバンの農地は五千人の人民を養ひ得るが、土地を耕さざる野蠻人は此面積で僅かに二十人を養ひ得るに過ぎない、由是觀之、人口の増加を養ひ得るものは土地の耕作の他はない、農業によりてのみ多くの人口を養ひ得るのである。農業を衰亡に委ね、土地を荒蕪の儘に乗て、結婚奨励其他の法令を出すも、そは何等人口を増加せしむるものではない。<sup>45)</sup>之に反し、若し生活資料が豊富であるならば人口は穀物庫に於ける鼠の如く増加するであらう、假令戦争、殺戮の如き事が度重らうども、生活資料

44) p. 38.

45) p. 42.

46) p. 43.

に缺かなければ人口の減退を生ぜない。<sup>47)</sup>

以上によつてミラボーが人口増加の必然的條件として生活資料の存在を高調してゐることを知らるゝが、而して又此點はケネーの主張と同一であるが、然しケネーにあつては彼の目標は當時の人口増加謳歌論者に一矢を酬ゆるにあつた、然るにミラボーにあつては其本旨は何よりも人口を増加せしむることであつた。人口増加を唯一目的として其ために農業を奨励し、生活資料を豊富ならしめんとした、彼自身人口増加論者と同じく人口を以て富そのものと視た文句は諸處に見る處であるが、彼に於ては富は土地と人口とから成り立つ、而して人口と農業とはケネーの云ふ如く一方が原因であり他方が結果であると云う一方的關係ではなく、相互關係である。<sup>48)</sup> 農業の繁榮は生活資料を豊富に與ふる結果、人口増加となり、人口増加は消費を増進し其結果農業を繁榮せしむ、兩者は因となり果となるものである。<sup>49)</sup> 彼は第二章の終の句を「吾人は人口増加が如何にして生活資料の増加を導くかを研究するであらう」と結んでゐるに徴しても彼が此關係をケネーの如く一方的に生活資料を原因とし、人口増加を其結果と考へてゐないで、其反對作用をも認め得る事を知ることが出来る。従てミラボーの人口論は、當時恰かも常識となれる人口論者 Populacionist の説を右端とし、ケネーの人口論を之に正反對の左端とすれば、丁度此中間に存するものと云ふべきであらう。

47) p. 52. 53.

48) p. 35.

49) Gonnard, Histoire des doctrines de la Population. p. 162.

50) Mirabeau. p. 73.